

# 記号の王国：＜日本＞の権力分析

橋 爪 大三郎

## ABBREVIATIONS

AJS = American Journal of Sociology  
 ASR = American Sociological Review  
 JC = Journal of Communication  
 JEP = Journal of Educational Psychology  
 JESP = Journal of Experimental Social Psychology  
 JPSP = Journal of Personality and Social Psychology  
 PB = Psychological Bulletin  
 POQ = Public Opinion Quarterly  
 PSPB = Personality and Social Psychology Bulletin

この報告は、以下に掲げるような3つの仮説的主張をなすことを目的とする。すなわち：

第1に、記号学は、必要に応じて、権力分析と運動し、権力分析によって補われるべきこと、  
 第2に、権力分析の明らかにするところでは＜日本＞の権力秩序は、"togethernessの優越"  
 という固有の社会技術のうえに編みだされていると考えられること。

第3に、＜日本＞の権力秩序を樹立する権力工学、とりわけ墓藩制の権力工学が、「日本的  
 な」記号現象を大きく規定しているとみられること。

こうした作業は、＜日本＞を記述する記号学的＝組織神学的努力の一環である。着手したばかりでもあり、過誤や遺漏も少くないと思われるので、ご批判・ご叱正をおおぎたい。

## 1. 記号学と権力分析

はじめに、記号学と権力分析の関係について、簡単に私の見解をのべる。

記号学という研究分野のidentityは、対象にあるよりも、むしろ分析手法にあると言えよう。記号学にたずさわる人々は、漠然としたかたちではあるが、言語学などに倣った分析手法をゆるやかに共有している。したがって、「記号現象としての＜日本的＞なもの」を解明せよという課題に対しても、日本において特徴的な記号現象であるとして一般に信じられている事象を抜きだして、それを説明すべき対象と定め、そこに記号学的分析手法を適用してゆこうと考えるのが、最も素直な発想であるのかもしれない。たしかにそうすれば、確実にある結果がえられるだろうから、「安全操業」には違いないのである。

しかし私は、それでは不十分だと思う。そのように考える理由はいろいろあるが、その最大の理由は、＜日本＞においては記号現象が権力の作用から明瞭に分離していないとみられるからである。記号学はふつう、権力の考察とほとんど無縁と信じられている。これは、記号学をうみだした西欧世界の権力秩序を暗然裡に前提している。記号現象と権力現象とが混淆しているとすれば、それは通常の記号学がかならずしも予想しない事態であ

ろう

記号学の手法を採用することで、記号現象の日本的な特殊性について、なにがしかの結論をうることは難しくない。こうした特殊性は、日本に特有な権力の作用によってもたらされたものかもしれない。ところが、記号学（の分析技法）に内在するかぎり、権力は不可視なものにとどまる。それはせいぜい、コスモロジーに到達するにすぎない。そこで権力分析によって記号学を補い、記号現象の日本的な特殊性を説明する仮説を検証できるようにする必要がある。

ここで当然、権力とはどのように規定すべきか、等々といったことが問題となる。この点にたちいる暇はないが、私の理解の骨子をのべよう。まず、権力というとき実体的な権力機関の挙動のごとくに眼を奪われず、それをいたるところにみられる微視的な現象とみるのが重要である。権力に本質規定を与えれば、各人の了解作用の円環を經由して人と人との間に働く作用、となろう。ついで、社会の全域を秩序づける、権力工学とでも称すべき巨視的な工夫が考えられる。権力分析は、こうした権力の作動を考察する、社会学的な作業のひとつである。

## 2. <日本>の権力分析

そこでつぎに、<日本>の権力分析を具体的にすすめてみる。

日本社会論としてはすでに、いくつもの優れた仕事が公表されている。しかしそれらは、当面の課題にとって不向きなところがあるように思われる。たとえば、「タテ社会論」は、社会人類学的方法論として正統であり、日本固有の社会法則をうまく記述している反面、移入された外来の社会形象が<日本>でいかなる位置を占めるかなど、総じて高度な複合社会である日本の文化現象に対する射程に問題がある。また「劇場国家論」は、中国文明の周縁たる日本の位置を適切に捉える反面、東南アジアなど周縁社会一般と<日本>を区別しないことになる。「文明としてのイエ社会論」は、大胆かつ斬新な議論だが、次の点で異論をもつ：①日本社会に、ウジ社会/イエ社会の2つのサイクルを認めるが、定義も根拠も薄弱である；外来の社会形象の契機をもっと重視すべきだ。②社会のダイナミズムの源泉として「倣い拡大」などの生態学的論理を援用しているが、むしろ外来の社会形象と固有の社会技術とのあいだの軋轢をそこにおくべきだ、などの点である。

そこであらためて、次のように考えてみたい。

まず、日本社会の基底には、ある原則がある、と仮説的に前提する。この原則は、社会のいたるところで成立し、同時に歴史汎通的であると考えておく。この原則を、“togethernessの優越”とよぶ。togethernessとは、人々が社会生活の何らかの局面で互いに共在することをさす。つぎに、この固有の原則のうえに、普遍思想など外来の社会形象が蔽いかぶさる、と考える。ごく初期をのぞけば、歴史的にみて日本社会の常態は、このような重層であったとみて間違いない。

“togethernessの優越”の起源は、きわめて古い。こうした原則がかつて人々を支配していたであろう事実自体は不可視であるが、間接的にそれと知ることができる。状況証拠としては、考古学的資料、たとえば縄文期と弥生期との間に顕著な断絶がみとめられないこと、などがある。また南方からの影響が強かったとすると、太平洋海域の ambilineal な、つまりきわめてルーズな

親族集団を形成していたという推定がもっともらしい。とりわけ重要なのは、M. Weber の指摘であるが、のちに高度な文明を形成するにいたった社会で、都市国家の段階を経過しなかったのは唯一日本のみであるという。これは、いたるところで常態であった異族相互の全殺戮戦が、日本では例外的に生じなかったことをいみしている。歴史時代以降については、移入された普遍思想が<日本>の内部で特異な変容を被ることから、逆に“togethernessの優越”原則のはたらきを推測することができよう。これは泡箱と荷電粒子の関係に似ている。

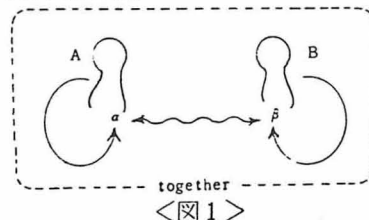
“togethernessの優越”とはいかなることか、説明を試みる。

いま、2人の人間A、Bがいるとせよ。共在するこの2人が、それぞれ $\alpha$ 、 $\beta$ なる社会形式（ないしは行動様式）に支配されているとする。ところで、この形式 $\alpha$ 、 $\beta$ は、つねに両立できるとは限らない。場合によっては、同時には実現できない可能性がある。こうして、A、Bの共在が脅かされる。この場合、生じうる可能性は、つぎのふたつの内のどちらかであろう：

(1) A、Bは、一緒にいること（togetherであることを）をやめる。

(2)  $\alpha$ 、 $\beta$ の少くとも一方を、 $\alpha'$ 、 $\beta'$ に変化させて、互いに両立できるものとする。

一般にどのような社会も、togethernessのある実現にちがいない。つねにおこりうる共在の危機に際して、いつ、どのような場合に(1)/(2)をとればよいのか、というむずかしい問題が生じる。どのような社会も、この問題に対処する系統的なやり方をもっていると考えられる。それを社会技術とよんでおこう。

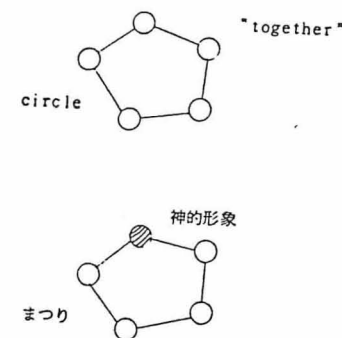


一方の人間Aがつねに(2)を選びつづける、(すなわちいつでも自分を支配する社会形式を変更する)なら、それはひとつの戦略である。彼は他者

との共在からはじきだされることはないだろう。しかし、それが有効な1個の社会技術であるためには、人々が一斉にその戦略をとるのではなければならない。“togethernessの優越”とは、各人がつねに(2)を選ぶことをいう。この原則のもとでは、どんな対立も決して全面的な対決には到らない。誰しもぎりぎりのところでは、自分の主張にこだわらず、それを放棄してしまう。こうしてこの原則は、異和を排除し宥和を極大にする機能をもつ。

こうして“togethernessの優越”は、ある1群の人々の集合もしくはcircleにおいて、実現される原則である。

togethernessのもとらす宥和は、貴重である。どの社会、どの民族もこれを高く評価する。しかし一般に、この技術だけで、十分大きな社会の全域を統合するのは、困難である。まず第1に、こうしたcircleは、(人々の相互作用が可能な範囲、といういみで)人々の機会的な集合であり、時間的にも空間的にも特定された社会のある局部でしか成立しない。さらにまた、こうしてばらばらに成立したcircleのおおのの凝集性は、互いに背馳する。“togethernessの優越”原則が行き渡ったとすれば、そのためにかえてこの原則は維持できず、社会は不安定になってしまうだろう。したがってたいがいの社会は、ある場合には(1)の戦略（togetherであることをやめること）を原則とするのである。父系、母系といった系譜原理は、人と人とを分離するための規則である。宗教や、カーストのような厳格な身分制も、同様の規則としてはたらく。こうして分離の原則は、



<図2> “togethernessの優越”

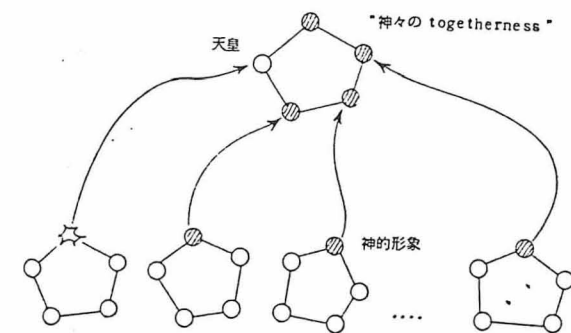
各人の恣意に服さず逆に各人を支配する 間身体的な第3項として絶体化するとき成立する。日本人は、こうした社会原則をしらないほとんど唯一の例である。

“togetherness”を一般化した場合には、宥和によって結ばれる機会的なcircleのおおのをどう関係づけるかが、最大の問題となる。各circleを布置・配列する権力工学が、ここに要請される。

言うまでもなく、<日本>の権力工学の特異な様式とは、天皇制である。私の見解では、この天皇制こそ、“togethernessの優越”に対処するものである。歴史の当初に早くもその姿をあらわし、今日にいたるまで繰り返えし再生をつづけている天皇制の原理は、任意のcircleを神話的に調停するもうひとつのcircleを頂いた、<図3>によって示されるはずだ。これを、天皇制の基本範式とよぼう。

togethernessにもとづく人々のcircleは、その凝集の正当性を、1個の神的形象に託する。これは典型的には、共食儀礼によって人々と同列に結びつくような神格である。この神格は、人々の集合が機会的である度合に応じて、時間的・空間的に限局された存在であり、また相対的な存在である。ときとして、あるcircleにはこのような神格が欠けているようにみえるが、<日本>の権力工学のロジックから言えば、それはたまたま“不在”する神的形象にすぎない。一揆の旗じるし、屋号、……など、任意の記号がそれを代補する。

いっぽう天皇は、これら神々の togetherness



<図3> 天皇制の基本範式

を体现できる、特異な人格である。天皇は祭祀王として、自ら神々のあいだにたちまじる。それら神々は、各circleに由来する神々である。各circleの整合性は、天皇の演出する仮想的な神々のtogethernessによって「保証」される。こうして天皇は、各circleに対しては、全域にわたるその統合の象徴となり、不在の神的形象にかかわって、「非在の臨在」というかたちの君臨をとげる。こうして天皇は、＜日本＞における正統性の源泉となる。

この独特な権力工学は、天皇族が他の諸族を宥和のうちに平定したとき、はじめて明確なかたちをとった。そしてこの権力工学は、＜日本＞がその後いくたびか普遍思想を受け入れたにもかかわらず、強固に継承されている。天皇制がまがりなりにも、途切れることなく今日まで続いているのがその証拠である。「万世一系」と称されるこの継続性の根拠はなにか？もしも天皇位の継承が何らかのルール（たとえば厳格な血統原理）にもとづくとしたら、必ずやルール違反を生じて王朝は途絶しよう。天皇位の継承とは、正統性原則にもとづく統承ではなく、正統性の端的な継承である。天皇制は、それ自身無形式であることを通じて、「togethernessの優越」を安堵する。

「togethernessの優越」は、各人に、彼固有の社会形式をもつことを許さない。このことは、人々が社会の具体的な形態を決定できないという危険な事態をいみする。外来の普遍思想をまとなければならない＜日本＞の必然は、ここにある。

普遍思想とは、古代オリエントやギリシャ・ローマ世界、インド、中国など文明の中心地で、全殺戮の反復を通じて鍛えられた、普遍法、普遍宗教、官僚制などをいう。これらは多数の民族に共有されうる普遍的な形式をそなえている。

明治以前に＜日本＞が継受した普遍思想として注目すべきは、仏教、律令、儒教の3つであろう。しかし、「togethernessの優越」する＜日本＞で、普遍思想はその本来の性能を発揮するわけではない。普遍思想の性能は、土俗に囲繞された身体を解きはなつ、形式の上位審級たることに由来した。ところが＜日本＞では、普遍思想よりも、固有の権力工学のほうがつねに優位する。そして

普遍思想の諸形式は、「togethernessの優越」原則のなかで、その効力を解除され、特徴的な仕方でも溶融していく。あまつさえ＜日本＞は、はじめから、普遍思想を仏・儒・道の三教合一論のかたちで移入した。こうして威力を殺がれた普遍思想は、垂迹説などを通して、権力工学にいよいよ屈従していく。

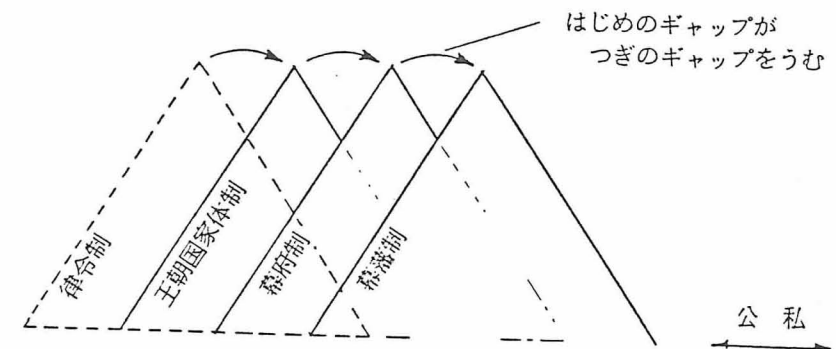
＜日本＞において、あらゆる普遍思想は、そのもとで固有の権力工学を作動させるために、かりそめに営まれる擬態にはかならない。＜日本＞は、固有の形而上学をうまないことを代償として、この権力工学の温存をはかる。

＜日本＞が、「togethernessの優越」にもとづく権力工学を一貫して運営してきたという事実を、統治形態の変遷のなかにあてつけてみよう。ここで気付かれることは、統治機構を含めた統治の形式がいかようにも変化していくようにみえること、にもかかわらず、新たに登場する統治の形式が前代の支配の正統性を否定するという事態が決して生じないことである。これは、社会形式が人々の間で絶対的ないみをもたないことの帰結であり、＜日本＞の権力分析においては既存の政治（哲）学の用語・概念系列が必ずしも有効でないという困難にも通じる。したがって、＜日本＞の権力分析には新たな記述の文体が要求されるが、ここでは第1次近似として、通用の概念に依拠する。

大化改新にひきつづきいったん整えられた律令国家体制は、むしろ＜日本＞の統治形態にありえぬ規程を提供するためのものであるとみえる。幕藩制にいたる日本の統治形態の変遷は、この規程からの逸脱の累積にはかならない。普遍思想に由来する外被と「togethernessの優越」原則との緊張にもとづくダイナミズムが、こうした歴史上の形象の交替を十分に説明するだろう。

官僚制は、宗教（父系氏族）からの絶縁をはかるために儒学（中国の普遍思想）が考案した組織形態である。しかし、「togethernessの優越」原則は、官僚制の原則にそぐわない。なぜならそれは、上級の適法な命令よりも、直属上司とのtogetherな関係のほうを優先させるからである。律令官制の機能不全は、兵制にまっ先にあら

＜図4＞



われた。生命をかけた戦闘行為は、当時においてももっともtogetherな集団であったウジ族の紐帯を無視してはなしえないからである。こうして、健児制や衛府制などの中間形態を含めて、正規軍はやがて解体し、かわって以後、血族関係や私的な主従関係によってつながった私兵の集団が、明治にいたるまで軍勢力の常態を占める。

「togethernessの優越」は、「公」の觀念の成立をはばむ。「公」の觀念は、ある空間が一樣に普遍思想（ことに普遍法）によって支配された状態を前提とする。しかし＜日本＞の権力工学はそもそも、このような一樣で開けた空間をつくり出さないといつてよい。公地公民制に対する私有地・荘園、官僚制に対するその世襲化が、律令制をほぼ換骨奪胎しつつところに、平安の王朝国家体制が生じる。

王朝国家の統治形態は、その支配の正統性を、なおも律令制を経由して備給しようとする。その実、権門の社会的實力は、公地公民を私的に占有するところから由来していたから、その占有を維持するため、私的な武装勢力が動員されることになる。ところがこの律令制からの偏倚は、権門よりもさらに正統性の稀薄なこれら武装勢力の専横を押しとどめえず、かえってその偏倚の増幅された形態、すなわち幕府をうみだす。

幕府には、律令制的な支配の正当性をもたない開発地主層の正統性希求が結晶する。幕府はこれにこたえるが（本領安堵）、その権威は最終的には朝廷の担保に依存しなければならなかった。幕府の権威は、律令の法制とまったく無縁な固有法の体系を成文化することを必須としたが（貞永式目）、こうした法・権利の重層関係は、中世の重要な空間的特徴である。「togethernessの優越」原

則は、聖／俗の明瞭な分離を許さないが、＜日本＞は権力を2重中心化することによって、類似の効果をもたらした。

幕府制の採用した権力工学は、族縁的な権力工学とでも称すべきものである。これは、血縁的な契機に主従制の契機を付加して、在地地主としての機動性にこたえられるよう機能化したものだ。しかし経営が一円支配形態へと移行するにつれ、場所論的な権力工学がこれにとってかわる。この帰結は、複数の包括的な領域支配の対立並存、すなわち大名領国制にはかならない。包括的な領域支配は、律令制的な諸要因を排斥するから、限りなく正統性の創造へ、すなわち新しい公的秩序の設定へと接近するとみられるかもしれぬ。しかし大名の領国支配は、そのための契機、たとえば法による支配の契機を欠いている。室町期以降に出現した「喧嘩両成敗の法」は大名の家臣団を統制したが、これは理の如何を問わず双方を同罪に処すものである。こうしたtogethernessにおいて大名のもとに結束する領国相互の抗争は、結局大名の私闘の域を思ふ、それを調停するものとして再び律令的な正統性に依存せざるをえないのであった。

大名領国制が戦国争乱として現象したので、それに対するアンチテーゼとして幕藩制が登場する。幕藩制の太平は、正統性の創造によるかわりに、大名領国に対して「togethernessの優越」を強要する監禁技術（質と脅迫の複合）からもたらされた。幕藩制は、家臣の城下への集住、大名の江戸への集結という、togethernessの2重層を特徴とする。そして、その場所論的な権力工学を支える正統性の源泉として、幕藩制の＜外＞なる天皇を必要とする。



幕府制の権力工学は、「家」のような抽象的な権力形象をうみ、それへの帰依を動員しつづける。この装置は、端的に場所であるような区画から成立っているので、その区画を内から破壊するような、自律的な正統化の運動（切支丹のような普遍思想、ないしは宗門一揆のような宗教的原理主義）を抑圧解除することなしには成立たない。儒学、わけでも朱子学は、それらにかわって、在地領主であることをやめた武士の抽象的な臣従を弁証するはずであったが、そこで賦活された正統性の観念は、やがて幕府の律令制からの偏倚を衝き、場所論的な権力工学自体を瓦解させる因となる。

明治天皇制は、新たに西欧的な普遍思想の意匠をまとして、律令的な明快さとともに出発しようとするが、むしろその実態は、固有の権力分析の対象にこそふさわしい。そして訪れた当然の破局のあとに、いまく日本を包む象徴天皇制の権力工学もまた、その普遍思想の外被を剥落させながら、その奇怪な動きをあらわにしはじめている。

### 3. 記号現象における、日本的なもの

ところで、このようなく日本固有の権力工学と、日本における記号現象（とりわけその美的な形象）とは、どのように関係しているか？さいごにこの問題を考えるため、いったん西欧に眼を転じ、普遍思想と記号現象、記号学の関係について考察してみる。

普遍思想と呼ばれるべきものの中核部分は、万人誰しもが異論の余地なく納得し、受容するほかないような、形式的・論理的手続き（もしくはそれに準ずる操作）からなる。それゆえ、いくつかの異なった普遍思想の種差は、それが採用する前提の差異にもとづく。この前提は、普遍思想のなかでは、あたかも何ら仮説的前提ではないかのように、たとえば人権、人間性、……などとして実体化される。というのは、普遍思想もまたひとつの言語ゲームであり、その内的視点にたてば、ゲームの各項は積極的なものとなるからである。

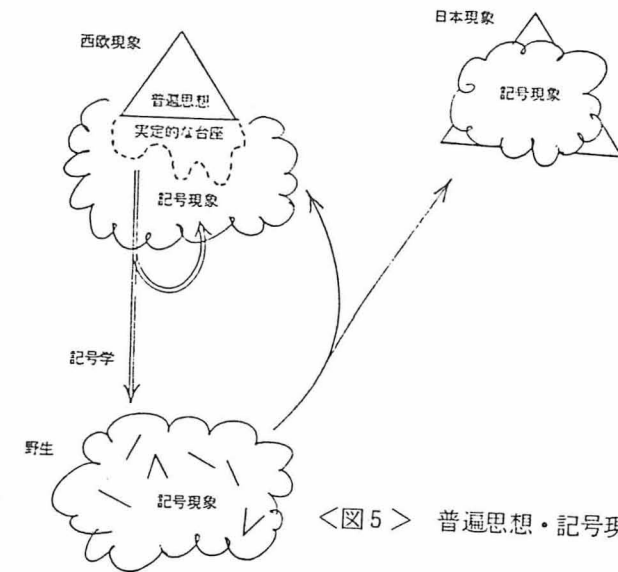
西欧の普遍思想は、大局からみて、プラトニズム派の「公理と証明」、ヘブライズム派の「啓典と解釈」、の2系統を合流させているが、ここから西欧現象とも言うべき複合がうまれている。

記号学以前の諸学は、西欧現象のうみだす普遍思想に自体的に内属していた。それに対して記号学は、この普遍思想を支える実定的な台座そのものを突き崩すように働く。Saussure は言語に関して注目すべき形式観＝反－実体観をもちこんだ。しかるに言語（もしくは記号）とは、まさに西欧普遍思想の実体的な構成素にはかならない。20世紀の言語学は当然、このSaussure の仕事から再出発する。そして、記号学が、Saussure とそれ以降の言語学に方法論的な端緒をもとうとするのは、その反－実体観において通底するためである。

記号学は第1次的には、野生へむかうものである。野生は、理性という制度にもとづかぬ、西欧現象にとっての異質な他者であるが、記号学はそこに、理性に対等しはばそれに匹敵する、集合的な思维のはたらきをみとめる。記号学のこのような脱中心化的な指向は、一方で西欧普遍思想を離脱する試みでありながら、もう一方では、記号学の形をとった西欧現象の究極的な普遍化の企てであるとも考えられるという、2重性を帯びている。

記号学の学としての普遍性は、野生の思维や神話的思考を含め、西欧普遍思想に外在する思维の諸形態をのこらず解明しうるか否かにかかっている。そのため記号学は、第2次的には、西欧現象が普遍思想の運動の周縁部に積みのこした諸現象、たとえば、消費世界の神話的思考であるとか、社会史の微細な日常であるとかいった周縁的な諸現象へと向かう。記号学の直接的な研究対象である記号現象は、普遍思想の場合のように一貫した整合性によって内在的に秩序づけられているかわりに、適当な領域区分によって断片的に処遇するしかないような集合的な思维と記号の渦巻きといった様相を呈している。こうして、個々の記号学的な努力は地道な個別研究として営まれ、かろうじて共有されるのは形式的な分析手法だけであるようにみえる。しかし記号学的研究の積分的な効果は、西欧普遍思想を1個の制度として記述するにただけの性能を、やがて発揮するにいたるはずである。それは当然にも、形式の専制にもとづく1個の制度である。

こうして記号学は、野生をその一方の極、西欧



＜図5＞ 普遍思想・記号現象・記号学

現象をそのもう一方の極とする、1本の尺度ないしは階梯を描きだすことになる。西欧現象を訪れた制度化を、この階梯上の移行として描くならば、それにつれて記号現象のなかに制度としての形式の専制がおとずれ、神話的思考（の一部）が理性へと変容されることになる。

ところがく日本は、こうした階梯のうえに位置づかない。それは、普遍思想の外被のもとで営まれる擬態、すなわち日本現象である。この日本現象こそ、記号学にとっては最も困難な対象であるだろう。なぜならそこでは、形式が制度をかたちづけているのではなく、制度の本体は形式をさらに支配する上位審級、そう、権力工学のなかに所在するから。日本現象に対して、形式的な分析技法を単純に適用するのでは、的を外してしまうだろう。

この事情にもう少々たいるため、美について考えてみる。美は、記号現象のなかでも重要な領域を区画する理念であるが、いまこの領域を試みに、感性和形式との相互規定の領域としておさえる。美的形式が美的感性を手がかりに指定される一方、美的感性が美的形式によって惹起されるという、双方向的な規定の円環が、一般にみとめられよう。

さて野生にあっては、感性和形式とは、習俗のなかで膠着している。あるいは、感性和形式との相互規定のダイナミズムを、自覚的な洗練へと向

かわせる制度的な通路を欠く、とも言える。

ここから西欧現象への向きにみとめられる美的洗練は、形式の専制によってもたらされる。すなわち、美的領域は、普遍思想との関係において制度化され、構成であるとか、作品、個性、独創、……といった諸契機を結節しはじめる。

いっぽう、日本現象における美的洗練は、これと異なる方向へすすむようにみえる。く日本の美の理念はおそらく、感性の専制にある。習俗の膠着がゆるむと、感性和形式の相互規定は活性化する。これを洗練にもたらす途は、感性もしくは形式による専制を設定して、美的な制度を開始することである。ところが“togethernessの優越”原則は、ある身体を特定の社会形式が永らく支配しつづけることを許さない。こうしてく日本が、西欧現象にみられるような形式の専制にもとづく美的な制度を自生させる途は、とざされる。そして反対に、く日本は、普遍思想に由来する幾多の美的形象をほとんど無際限に移入しながらも、それらを感性の専制のもとに屈従させる洗練の極を、夢みるのである。

“togethernessの優越”原則と、美的領域との関係を、もう少し考察しよう。この原則によれば、あるcircleの人々を支配するのは、美的形象に関する形式的規準ではなくて、美的な感性の共有傾向（共感）であるしかない。こうしてく日本の美的洗練は、美学的な言説によって述

定できないことにもなる。だがこれは一面の困難である。というのは、感性は本性上、美的形式に感応する temporal な身体の状態であり、それを規準に具体的な制度を構成することができないから。ここで採用される〈日本〉の美の制度は、美が一時的であるという断念にみちた了解自身を、共有するという工夫である。美の源泉は、人為にもとづく形式のあいだにはなく、それをこえた感性と形式との相互関係それ自身のうちに、すなわち“自然”のうちに、具わっていると信憑される。このような“自然”を、人々の共感の同調によって分節することが、“季節”ということのいみである。これは無形式な、まったく特異な美の規範であると言わねばならない。

〈日本〉においては、感性⇄形式の相互性が美的領域の豊饒性の起点、端的に“自然”として表象されるのにひきかえ、形式は貶斥される。これは、思想的な営為の場合に教条がおとしめられるのと並行する現象である。ところで、形式は、誰かが表現してそこへ定在させない限り、それを享受し感応することもできない。そこで、〈日本〉的な美の理念にもとづく、もうひとつの困難が生ずる。すなわち、美的な洗練をたどるための、表現する身体にそなわる形式を、どのように確保するのか？これは、感性の専制にもとづく美の制度にとって、本質的な困難であると言ってよい。

“togethernessの優越”原則のもとで、身体が恒常的に特定の社会形式のもとにおかれることはない。たとえあったとしても、それは偶然でなければ、気まぐれな片意地であり、滑稽視される。〈日本〉の社会技術は、形式と身体との関係という厳密ないみでの、倫理を発生させないのである。“togethernessの優越”とは、ある形式をめぐる人々の togetherness に関わるテ-

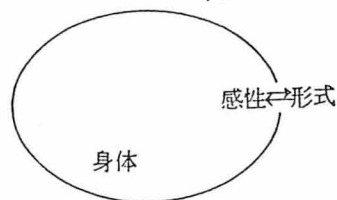


図6

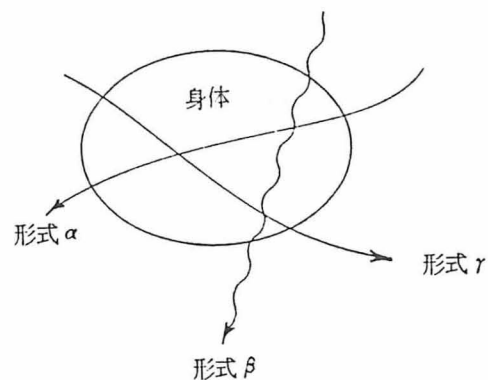


図7

ゼであったが、これをある1個の身体について書き直してみれば、諸々の形式の togetherness に他ならぬ。このような状態のもとで、普遍思想とも形而上学とも無関係に、美的形式を洗練することは難しい。

そこで、身体を永続的に支配するために、形式は、権力工学の援けを借りる必要がある。こうして、日本的な監禁と規律訓練の方式がいとなまれる。

渡来人や帰化人が重きをなした最初期、族縁的な権力工学が関与したと思われる中世期については、話をおく。今日に“日本的”として伝わる多くの美的伝統が開始されたのは、室町期以降とい

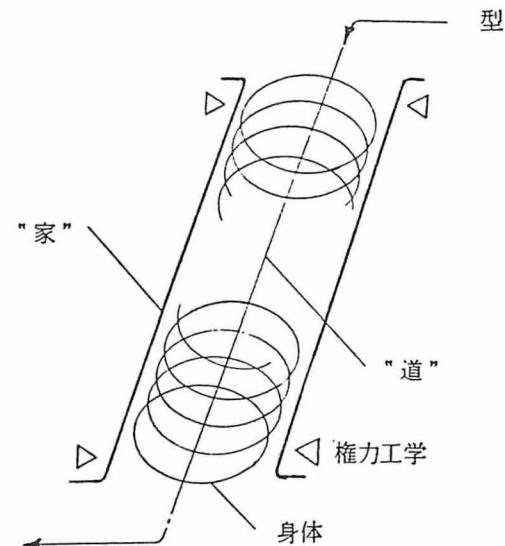


図8 場所論的な権力工学と、型

うが、これは場所論的な権力工学による空間編成の開始期にあたる。家という形象（ないし家元制）が、このための装置に他ならない。これは時間軸の方向に身体を詰めた伝送パイプであり、形式の減衰しない継承を確保しようとする。権力工学はこれに関与し、身体が諸々の形式の交錯のもとにおかれることから防護する。こうして他と区別され実定化される形式が、型であり、身体を貫通するその継承線が、“道”にはかならない。

\*

美的領域をはじめさまざまな領域で〈日本〉の記号現象を記述する作業は、まず第一に用語と文体の選定の段階で、困難をきわめる。おそらくそのために、西欧普遍思想から出発した記号学は、日本現象と西欧現象とを同等に論定できる水準にまで下降して、その概念枠を分解整理する必要があるだろう。そうすれば、たとえば記号学と権力分析との提携の継ぎ手ももっとはっきりする。記号学は普遍的であるから、日本の記号現象にそれをただ適用してすませることもできよう。しかしそれを権力分析によって補えば、はるかに生産的である。なぜなら、〈日本〉においては、美やそのほかの記号領域が、自足的な小領域であるよりも、不可視の権力の作動によって浸しつくされていると見えるから。

西欧の普遍思想は、権力にかなり明確な形式を与え、その作動を他の領域、たとえば記号領域から分離することに成功した。このような分離は、人と人との中間項が“絶対”の性質を帯びない日本の場合、生じにくい。固有の普遍思想・形而上学を保たない〈日本〉は、“絶対”の概念をしらないが、それに相当する3つの場合があるように思われる。第1に、形式のまえに身体が潰れることである「死」。これは、「倫理」の代用となる。死は、自然に内蔵されており、美的事象でもある（〈図6〉）。第2に、つねに優越する人々の togetherness、あるいは「空気」。これは、「正統性」の代用となる（〈図2〉）。第3に、権力工学によって支持された形式の継承である「型」。これは「法」の代用となる（〈図8〉）。

これは、〈日本〉を解読する補助線の、ほんの一例である。このような考察が明らかとするのは、

言語や美的形象やそのほかさまざまな普遍思想の構成素が、その本来の性能を剥奪され断片化されたまま、いわば単なる諸記号となって、記号現象の渦巻のなかを舞っているという〈日本〉の図柄である。この全域を統合するのは、古代より今に伸長する土俗の王権によって象徴される権力工学にはかならない。世界史の異例である〈日本〉、この記号の王国が、いかにして先端的な資本制の同時代を演ずるに到ったかを、その記号現象と権力工学の地質学的堆積において明らかにする作業が、次なる課題であろう。

## あとがき

ここに掲載する原稿は、1983年4月23・24日の両日、東京大学教養学部で開催された第3回日本記号学会大会の、第2日目のシンポジウム“記号現象における〈日本的〉なるもの”における私の報告である。当日の口頭発表では、時間の制約もあり、別に用意した原稿で要旨を読みあげるにとどまったが、このたび、本誌編集委員会のご厚意により、当日の配布原稿を全文そのまま掲載していただけることになった。粗削りだが、愛着の深い論文なので、発表の機会が与えられたことに感謝している。

なお、本稿には姉妹編、「にっぽん：記号の王国論（NIPPON: the Realm of Signs）」があり、その仏訳が昨年、Traverses誌の33/34号に掲載された。日本語稿は未発表であるが、いずれ他のものと合わせて活字にしたいと思っている。

本稿の内容が本誌にふさわしいかどうか、ためらいがあったことを、正直にのべておこう。私は、きちんと社会心理学のトレーニングを受けたわけでもないし、社会心理学の論文を継続的に読んでいない。しかも本稿は、記号学者を読者に想定している。そして彼らに、わが国で記号現象を考察する場合、いわゆる記号学に頼るだけではだめで、権力分析の視角が重要である、と主張している。この趣旨は本稿につけているので、以下では、

その主張の前提のほうを補足しておこう。すなわち、社会心理現象の領域と記号学とがどうつながるかについて、私の理解を簡単にのべてみる。

心理学と社会学との中間に、社会心理学が位置する。これは当然すぎるのかもしれないが、どういう理由からか？その方法論的根拠を反省してみよう。

まず三者とも、人間を対象とする点で共通する。ではその種差はといえば、心理学の場合、単離された個体（行動有機体）の内部構造を説明の主題とし、外界の刺激をコントロール因子として実証の構図を組む。ここでは、社会的文脈の所在は関与的でない（いわば context-free）。これに対して社会学の場合は、諸個体とその構成する社会関係の総体（社会秩序）を一般に説明の主題とする。そこには社会的文脈も、もちろん含まれている。社会秩序は相対的に自律したものであるため、社会学は明快な実証の構図を組むのが難しくなっている。

社会心理学は、（複数の）個体の内部構造や相互作用を説明の主題とし、一定の社会的文脈を所与として実証の構図を組む。社会学よりも一般性を落とすことで、実証の構図は明快になっている。また心理学と異なって、社会的文脈の記述部門を

そなえていなければならない。文化的・地域的・階層的・歴史的特異性であるとか、特定の社会環境が、コントロール因子として重要になる。

さて、記号現象は、諸個体の相互作用の一形態である。特に、特定の社会的文脈が諸個体の内部構造をかたちづけている場合の相互作用に相当しよう。この内部構造は、コードとよばれる。記号学は、コードの共有を前提にして相互作用の形態を解釈する（あるいは逆に、相互作用の形態からコードの内容を推定する）という手続きを実行する。

記号学を社会心理学は、有効に利用できるし、すべきだ、というのが私の考えである。従来記号学は、コードと記号とが相互包絡してしまうのを処理できないため、実証法に難点があるとされてきた。けれども、記号体系は、一定の社会的文脈が存在することの明瞭なしるしである。さきの権力分析は、記号現象の微細な偏倚を観測し、それを身体上での権力の効果として実証しようという提案であった。これとはまた違った角度からになるが、社会心理学も、記号学の記述的な性能を活かして、必要な社会的文脈を特定し、その実証の構図に織り込むことができるのではなかろうか。

（1986.4.10記）

## Abstract

### The Realm of Signs: A Power-analysis of NIPPON

Daisaburo Hashizume

NIPPON (Or Japan) has a social law of its own which I call the Dominance of "Togetherness." Under the law, 'any forms (words or other social figures) cannot take hold of the bodies of men.' People let forms come off their bodies in order to give the highest priority to their being together--a unique technique of power. The symbol of such technique prevailing in the whole space of NIPPON is "Tenno," the omni-absent devine-king.

We will be sure to create, under the working hypotheses stated above, a better understanding of the characteristics found in the history and the semiotic phenomena of NIPPON.

## 参考文献

- 橋爪大三郎 1979a 「言語ゲーム論考」, (未発表)。  
—— 1979b 「記号空間=社会」, (未発表)。  
—— 1979c 「間身体的作用力論」, (未発表)。  
—— 1980 「歴史: 局所と全域における」, (未発表)。  
—— 1981a 「法の記号論へ」, 『記号学研究』1: 95-106。  
—— 1981b 「『ツィゴイネルワイゼン』: 知の擬態」, 『月刊イメージフォーラム』2-6  
—— 1982a 「戦後日本の正統論」, (未発表)。  
—— 1982b 「性愛論」, (未発表)。  
—— 1983 「近代政治学の根本問題」, 『ソシオロギス』7: 120-129。